

北の国から居ながらに

理事 高橋正宏

新理事となって8か月ほどたちます。この間、小規模下水処理場分科会を立ち上げ、21世紀水倶楽部で様々な活動にかかわることができました。水倶楽部の活動以外にも、日本下水道協会や下水道新技術推進機構などの会議に相変わらず参加しております。ただし、水倶楽部の活動も含め、全てがオンラインで済んでいるというところが、コロナ禍以前と様変わりしたことです。札幌の自宅から一歩も出ることなく、多くの方と意見交換できる便利さには目を見張ります。これが、コロナ禍以前ですと、旅費の出る公の会議以外、つまり水倶楽部の総会はもとより、理事会や分科会などに札幌から飛行機に乗って出席することはまず不可能で、私などは水倶楽部の幽霊会員で終わったかもしれません。最近は様々な団体が主催するウェビナーも盛況なようで、事情が許す限り参加するようにしています。これも、札幌から、時間と空間の制約を受けずに（無料が多いのでお金の制約も受けずに）様々な情報を得ることができます。



ただ、ウェビナーは、ほぼ一方通行ですのでそんなもので済ますことができます。オンライン会議は今のところ、以前に顔見知りとなっている方が多く参加していますので、コミュニケーションをとるうえでおおきな支障はありません。問題は、初対面の方と議論する場合です。小規模下水処理場分科会では、全国の小規模下水処理場の運転管理の実態を調べ、どのような工夫がなされているのか、処理場の更新にあたってはどのようなことに留意すべきか、などを情報発信する予定ですが、今は現場にお邪魔して、詳しく議論することができません。コロナ禍前にはいくつかの処理場にて、現場を見学し、維持管理の方と議論できたので、貴重な知見を

収集することができました。初見の場所、初対面の方は、やはり、対面することが必要と痛感しています。

気心が知れた方とも、オンライン飲み会ばかりではなく、実際の飲み会でお会いしたいものです。

2021 年度活動報告

研究集会「雨水ますと泥溜めを考える～雨水ますでの蚊の発生対策～」開催報告

理事 竹石和夫

1月28日、研究集会「雨水ますと泥溜めを考える～雨水ますでの蚊の発生対策～」が開催され、高島会員とともに司会を担当した。コロナ感染第6波により会場参加を急遽絞り、報道の方にもWebでの取材をお願いした。

雨水ますが蚊の発生源になっていると指摘を受けている。平成26年には代々木公園等で162人のデング熱の感染者が確認され、雨水ます等の清掃、薬剤散布が行われた。排水設備の雨水ますには法に泥溜め設置の規定があるが、雨水の滞留が蚊の原因になっているとされ薬剤散布も行われている。

土砂流入の減少や維持管理の負担により、泥溜めの役割について議論がされており、施設設計指針の部分見直しも行われた。本研究集会では雨水ますや泥溜めについて情報を提供するとともに、役割や維持管理のあり方について議論することを目的とした。

栗原理事長の挨拶の後、4人の講師による講演が行われた。

まず管清工業深谷渉氏より、雨水ます等の役割、下水道法の泥溜めの規定、雨水ますに関する構造基準等の変遷と背景、まずに起因する浸入水や道路陥没、雨水ますと蚊に関する問題の経緯が紹介された。

次に東京都下水道局石井健二氏より、雨水ますに係る制度、維持管理の状況と都民要望、道路雨水ますでの蚊に対する23区の対応、殆どの区で成長抑制剤が投入されていることが報告された。また全国13市へのアンケート結果では、排水設備の泥溜めを指導していない市2市、道路雨水ますの泥溜めの廃止3市とのことであった。

3 番目の東京設計事務所山口登氏は、大阪市では合流改善対策として、平成6年から10年間でマンホール12.5万箇所をインバート化し、事業費58億円、1箇所当り46千円を要したと報告した。また問題の経緯を述べ、泥溜めは土砂流入の多い所に限定し、管理を徹底すべきと強調した。

最後に国立感染症研究所葛西真治氏は、感染症媒介蚊の生態、デング熱等の症例と現状、雨水ますと蚊の関係について紹介し、都市部での蚊の発生に雨水ますが関係していること、温暖化や海外との往來の増加により、蚊のリスクが増大していることを述べた。

質疑では法の規定や雨水浸透、成長抑制剤の効果等について議論された他、長崎大熱帯医学研究所川田准教授、九大楠田名誉教授から貴重なコメントをいただいた。今回研究集会では、衛生関係者の申込が4割を占め、分野横断の有意義な情報交換の場となった。今後管路分科会としてこの問題にどう取組むか考えたい。

オンライン(OL)推進分科会活動報告

齋藤 均@OL推進分科会 事務局

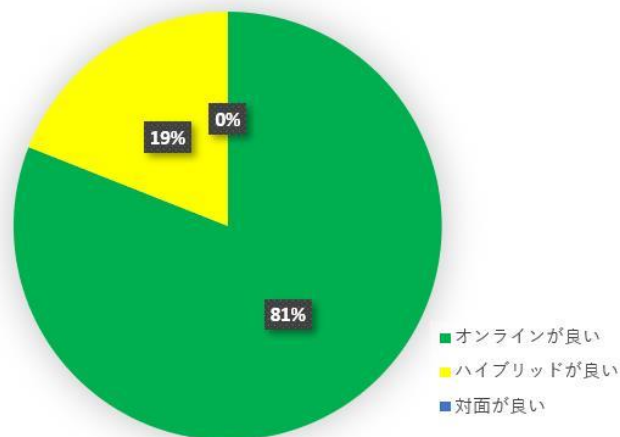
水倶楽部研究集会「雨水ますと泥溜めを考える」@1月28日開催で、Zoomを活用した水倶楽部の研究集会も4回目となった。研究集会参加者は、会場に直接赴く事なく、ネット環境が満足していれば、自宅や職場から気軽に参加可能である。コロナ感染症の収束が一向に見えない中、OL (Zoom) による、セミナー(ウェビナー)・研究集会の開催は、社会で一般的になりZoomの認知度も上がった。当倶楽部のZoom運営担当の当分科会も、研究集会の回を重ねる度に担当者がスキルアップし、OL研究集会もスムーズに開催出来るようになった。

今年度の主な活動を振り返ると、令和3年度の水倶楽部総会をOL開催し、記念講演もOLにて配信出来た。開催した研究集会「ゼロカーボン」と「雨水ますと泥溜め」の2回も、一般参加者はOLである。分科会は毎月開催の「基礎知識と普及部会」に所属し、部会と部会後懇親会もOLを活用しているため、Zoomの練習になっている。また、Zoomの社会認知度が上がった事から、研究集会の講師をされる方も「OL発表」と言う形を取る事が可能になった。

従来、研究集会会場は東京とされるので、講師がOL講演可能となる事により、遠隔地の講師の講演依頼もしやすくなった。「BISTRO 下水道」では、佐賀からOL発表を行った。また、参加者も全国から応じる事が可能になり、「雨水ますと泥溜め」では北海道～大分と全国各地からの応募があった。「ゼロカーボ

ン」研究集会からZoomアンケート機能により、集会の満足度・集会の開催方式について、参加者の意見を伺うようにした。直近では「大変良かった」が半数以上を占めるようになり、また「対面方式」の研究集会を望む声が無くなってしまった。

オンライン開催について



これまでの統計は無いが、最近の当倶楽部研究集会参加者の割合は「会員以外」が多くなって来ている。当倶楽部の「認知度と下水道広報の役割」も向上した感がある。

また、当倶楽部のOL研究集会は、参加者が議論出来る場に重きをおいている。このため、他のOL講習会等で活用されるウェビナーではなく、通常のZoomを使用している。

ウェビナーに比べ、Zoom担当者の操作に手間のかかる事もあるが、参加者の議論を重視した手作りのOL研究集会を、今後も開催してゆく。さらに、OL研究集会を支え、今後も高評価の維持を続けてゆく所存である。

会員だより

つくば道より

佐藤和明

つくばの地に旧土木研究所の移転と同時に越えてきて既に40年以上、すっかりつくばの住民となってしまった。海軍志願兵として霞ヶ浦航空隊にも一時勤務していた亡き父からは、生まれ故郷に戻ったのだと言われたことがある。戦後の食糧難で東京よりは食料事情が良い土浦に仮住まいをしていた時に私は生まれた。

亡き母は父と同じく東京の下町育ちである。府立第七高女の校歌には筑波山が出てくるよと言ってその一節を歌ってくれたことを思い出す。東京の住人にとって富士山はもちろん第一の山であるが、下町つまり東京の東側の住民には筑波山も同じくらい身近なお山であったと思う。なので、鉄道とかの便のな

い江戸の時代も結構江戸の庶民は筑波の地まで足を伸ばし、筑波山神社や筑波山詣でをしていたようだ。

「Habe ich ein schönes Weg gefunden ! (素晴らしい小径をみつけたよ!)」1980年当時西独アーヘン工科大学から土木研究所に招聘研究員として来られていた故カール・ヒベルン氏が私に報告してくれた。それは写真に示す石造りの一の鳥居から筑波神社に直登する道のことだ。

今は車が通れるようにコンクリートの道になっているが、勾配はかなりのもので以前は石段の道であったと



想像できる。閑静な集落を貫いて上の神社に続くこの昔からのつくば道は、この時期、垣根越しに梅の花や蜜柑の木を見ながらその上り下りを楽しむことができ、三々五々の登山客も見かける。ヒベルン氏もこの時期この辺りを散策し、つくば道の歴史を感じ取ったのではないかと思う。

この道の傍らに小林一茶の句碑を見つけた。「水仙や 垣に



ゆひ込む つくば山」とあり、ちょうど水仙も咲いていた。

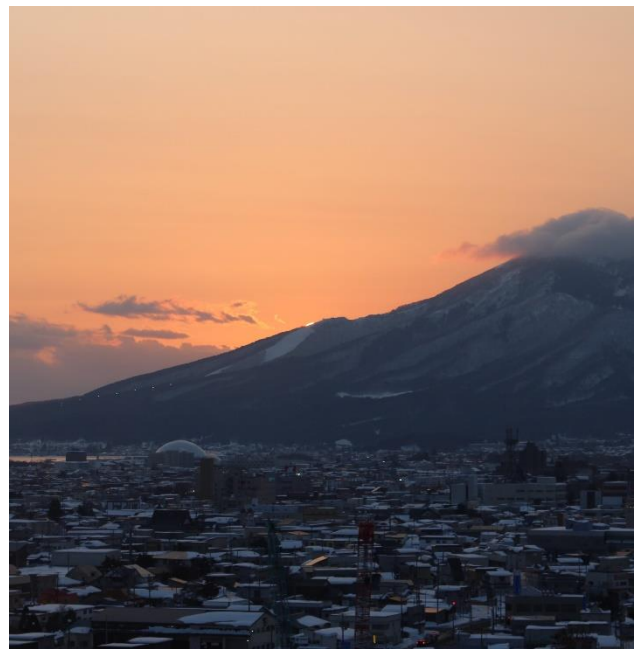
つくば道は下の北条の街から神郡の集落を抜けて真っすぐ南から山麓を上り筑波山神社に至る参道である。写真の一の鳥居の箇所では、毎年4月1日と11月1日の日に御座替わりという神事が行われ

る。冬の時期には子供の神様を山麓に下ろす代わりに親の神様が山頂の神社に鎮座するのだそう。優しい親心というか、大和民族の心根を垣間見るような気がする。

このコロナの時期に自由な活動ができない中、少し直登の負荷もあるつくば道は私の心身を快くほぐしてくれているのではないかと思う。

- 巻頭文は新理事の高橋正宏氏からいただきました。挿入の写真はご自宅の札幌市内でしょうか？私の経験する限りで札幌の冬は寒いものの雪はそれほど多くないですが、今年には異常な降雪のようです。それとも写真背景が除けた雪を高く積み上げただけかも。
- 会員だよりは前理事長の佐藤和明氏より。つくばは筑波研究学園都市として開発され、最新科学技術のメッカのイメージですが、古いものも見つけることができるのですね。
- 会員日よりコーナーへの投稿を募集しています。ステイホームなので多くの投稿を期待しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月



本州北辺・むつ市の凍える日没。背後は恐山山塊